

「北浜・船場における、近代建築の魅力と再生」

大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所
栗本智代

大阪で仕事を続けていると、歴史的な近代建築物の中に案内されることが度重なってくる。当初は「いい雰囲気のあるんだなあ」としか感じなかったのだが、大阪が最も成長を遂げた近代の歩みを知るにつれ、モダニズム精神の象徴である遺産として改めて見直したくなった。建築の専門家ではないため難しいことはわからないながらも1つ1つめぐってみると、さらに興味が深まり、建物内での食事やギャラリーなども楽しみ出すと、時間がいくらあっても足りない。

大阪市における近代建築の解体率は約66%にのぼるという報告があり、この20年ほどで急速に消滅していることがわかっている。（「大阪市都心3区における近代建築の保存・活用に関する研究」平成12年度日本建築学会近畿支部研究報告集より）。確かに今日、近代建築の保存は容易ではなく、建物の老朽化やOA化への対応、賃貸オフィスとしての経営困難など、ソフトハード両面で問題があり、民間の場合は収益を上げながらの保存が課題となる。

しかしビルのオーナーや店主の中で、こだわりと誇りをもって、各々の建築物に関わっていらっしゃる方も少なくなく、独自の味わいを生み出している。北浜・船場界隈からいくつか、新たな試みとして特長ある事例を紹介する。

<北浜レトロ～創建時のコンセプト“イギリス”へのこだわり～>

北浜の旧大阪証券取引所の北向かいにあるビルで、明治45年に竣工、もとは証券取引業者の店舗で、後に入った桂隆産業が倒産後、小山寿一さんが買い取られ「北浜レトロ株式会社」を設立された。

このビルは、イギリス人に習った日本の建築家が、当時のイギリスの建造物を想像して建てられたようだ。現オーナーの小山さんは、幽霊ビルのようになっていたのをもとの姿にもどしてあげたいと、建築時の明治末の雰囲気を大切に、自身の設計・デザインにより補修・改装された。そして、ティールームとアンティーク・雑貨の店舗として再スタートし、時代に迎合せずブームを追いかけない、クラシックなイギリスにこだわった「場」づくりが行われている。

<生駒ビルディング～コンシェルジュオフィスとしての挑戦～>

堺筋と平野町の角地に、昭和5年に竣工されたこのビルは、宗兵蔵の設計で、外観はスクラッチタイルやテラコッタを用いた彫りの深い味わいが特徴である。生駒時計店として用いられてきたが、耐震補強の改修が必要となり、その際、社長の生駒信夫さんは、民間

所有のまま維持保存していきたいと、収益性のある新しい業態に再生することを立案された。そして、ベンチャー企業である2つの会社にビルの企画・運営を委託し、新しいビジネスモデルの導入に踏み切った。それが、ホテルの中で仕事ができるような「コンシェルジュオフィス」である。28室の賃貸オフィスは全て椅子・机・多機能電話・インターネット回線が用意されており、1階のレセプションで秘書的業務を行ってくれるという。創立当初の雰囲気を十分に残すこのビルでの新しい試みを見守っていききたい。

< 旧大中証券ビル ~ 高級フランス料理店への転身 ~ >

高麗橋にある赤レンガのこのビルは、明治45年、辰野・片岡建築事務所によって建てられた。大中証券の移転後、ビルのオーナーが再生方法のコンペを行い、200件の応募の中から「シェ・ワダ」の和田信平シェフの案が採用されて、高級フランス料理店となった。

外観は、年齢を重ねた美しさを大切にするため、外壁のレンガも洗いを1回におさえ、看板やメニューもあまり目立たないように配慮したという。一方内部は、徹底的に手が加えられ、フランスからとりよせたインテリアや暖炉、職人による漆喰塗りの壁、時間を経るにつれて腐食する鏡など、生きている建物としていい皺ができるように工夫されている。老舗である「吉兆」の隣で、長年かけていいものを創っていききたいという和田シェフの思いが反映されている。

< ダコタハウス「SCOO」 ~ 新しい賑わい文化 ~ >

西船場にも、比較的小規模の近代建築が数多く集積している。江戸堀に位置する地上4階地下1階のこの建物は、大正末～昭和初期に竣工されたという。オーナーが建て替えを考えていたのだが、不動産コンサルティングの(株)アイディーユーの調査とアドバイスにより、歴史ある建築物として見定め、99年から6年間の定期借家として同社に一棟貸しをすることに。改装のポイントは、オリジナルの質感を保つことと、シンプルな空間づくりであった。「人が使って賑わい、利益をあげることで、不動産価値も上がる」という考えのもと、1階はカフェ、2階から4階はヘアデザインやメイク、アロマエステなどフリーアーティストのサロンとして活用されている。お客様は主に25歳から40歳前後。古いビルという素材を生かした雰囲気が、逆に新鮮でおしゃれだとリピーターが増えている。

昼と夜で全く表情が変わるのも魅力の1つで、特にあたたかい橙色の灯があふれる夜景に立ち止まる人も少なくない。

< 江戸堀コダマビル ~ 和洋と新旧の折衷 ~ >

昭和10年、岡本工務店(ヴォーリズの作品の施工を主に担当)

により竣工された。和洋折衷の外観が印象的なこのビルは、もとは綿布商を営んでいた児玉竹次郎氏の邸宅であり、昭和初期の当時、外観はもちろん設備を含め最先端の建物であった。創立者の孫にあたる現オーナー児玉竹之助さんは、昭和53年に改装の際、かつての雰囲気を残しながら、一部をテナント仕様とし、また音楽関係の知人が多い（自らもクラリネットを演奏される）ため、音楽専用のスタジオ・レッスンホールを設置された。子供から有名な音楽家まで、隠れ家的に愛用されている。さらに、ご本人の趣味であるイタリアコレクションを収蔵する「イタリア資料室」も開放されている。

外観入り口のルーフは、10年前にミラノの建築家がデザインしたもので、前庭には、解体された日本火災ビルの柱の柱頭部分が移設されている。「入り口や窓枠、ベランダなど1つ1つ修復したい」とあくまで竹次郎時代の姿を意識しつつ、現オーナー自身のこだわりとうまく折衷させて運営されている。今後3階部分で、昭和初期の家庭用品の変遷として、蔵に眠っていた実物の展示会をしたいと、企画を練っているのだそうだ。

< 細野ビル ~ アートを通じた交流の場へ ~ >

新町4丁目、地下鉄西長堀駅からすぐの角地に建つこのビルは、昭和11年竣工。設計施工を担当した建設会社細野組は、御堂筋の道路工事筆頭請負業者であり芦屋の六麓荘の開発など行った業績をもつが、その本社ビルとしてここが建てられた。施主は、会長の細野濱吉。当時細野組は石材の請負も行っていたので、上質な石材があちこちに使用されている。また元会長室や応接間の机、椅子、家具類は創立当初から変わらず残されている。

現オーナーの細野房雄さんは、このビルを取り壊して建て替える計画を進めるつもりだったのが、実際建物を見て、最高の石材や技術、デザインの素晴らしさに感動し、自ら手作業で修復しながら維持保存することにしたという。特に会長室は神聖な場所として考えられており、「濱吉の椅子には誰も座れない」と言われる。

今年の2月から新進気鋭のアーティストによる個展が開催されている。6月6日には「66展」(芦屋の六麓荘にもかけている)と題して66人のアーティストによるイベントが行われ、有名無名の老若男女で賑わう場となった。ギャラリーを始めてから、細野ビルをスケッチしにくる若い人も増え、「カジカジ」などファッション雑誌の撮影場所にも使用されるようになった。

細野さんは、「1階と地下のスペース代を自分の給料から引いても、このビルを大好きと言ってくれる人に利用していただいて、偶然の出会いがあるコミュニティの場にしたい」と語ってくださった。

これらの他にも例えば、オーナーの人柄が魅力で入居希望者がたえないというビルの話も何例か聞く。オーナーと店子が話をする機会が積極的に設けられ、あたたかい人間関係が育まれているようだ。オーナー自身の意図でギャラリーがつくられることも少なくない。

概して最近の特徴は、オーナーや経営者の思い入れやメッセージ性の強い「場」が誕生し、新しい価値が付加されていることだといえる。実際、少し前までは、中に入りにくい近代建築も多かったのが、仕様の変更を含めた改装で開かれた場になり、一般の人がふらりと、独自の空間を楽しめる機会が少しずつ増えている。その取り組みは、静かなファンによって成熟していくに違いない。

近代建築を活用した特有の「場」が、これからの新たな大阪のまち文化を生み出す源泉となりそうである。

写真キャプション

- * 北浜レトロ ティールーム (2F)
- * 旧大中証券ビル (シェワダ) 外観
- * 江戸堀コダマビル 外観
- * SCOO 1F カフェ「DAKOTA」